広島大学大学院教育学研究科紀要　第三部　第58号　2009　293－300

編入学の選択構造に関する考察

小方　直幸・立石　慎治

（2009年10月６日受理）

The Structure of Decision-making of Students for Transfer in Short-cycle Higher Education

Naoyuki Ogata and Shinji Tateishi

Abstract: The aim of this paper is to analyze the structure of decision-making of students for transfer in short-cycle higher education based on the "Survey on high school students' progression" conducted by Center for Research on University Management and Policy, Tokyo University. After the descriptive analysis, binominal logistic regression model was used for analyzing the structure of decision-making of students for transfer at both time of high school and colleges. The primary results include: 1) Parents' expectation regulates their children's choice. 2) Academic record in junior high school and learning behavior in college affect students' choice. Further analysis of actual result of transfer to university and development of framework of student survey that focuses on another type of minority students remain as future issues.

Key words: transfer, progression, junior college, specialized training college
キーワード：編入学，進学行動，短期大学，専門学校

１．課題と方法

1.1. 背景と分析の枠組み

本稿は，編入学の選択過程を記述した上で，編入学という進路選択の規定要因を明らかにすることを目的としている。編入学は，短期大学や高等専門学校，専修学校専門課程の卒業者や学士課程の在籍者，卒業者が学士課程の途中年次に入学する制度であり，短期高等教育機関での学修者に更なる学習機会を提供する，また関心の変化に応じて学習内容を変えるための制度として，新制大学の制度発足時より運用されてきた。官庁統計が得られる1980年以後を見ると，1990年代に大学が受け入れた編入学者数は増加の一途を辿った後，2000年以降は10,000人代前半の規模で安定的に推移している（学校基本調査各年版）。また，送り出し側である短大や高専の卒業生から見れば，近年ではそれぞれ約８％，25％が編入学をしており，就職と並ぶ重要な進路となっている（学校基本調査各年版，文部科学省 2009）[1)]。

従来の編入学に関する研究を振り返ると，編入学制度の運用状況や，編入学先の大学での学生生活や満足度，成績等の分析が中心で，編入学という進学行動自体の規定要因は十分に考察されてこなかった（立石 2009）。その背景には，編入学の規模自体が小さいために進学選択行動への関心が薄かったことに加えて，編入学選択の構造に対する考察を可能にするデータの収集自体の困難さが挙げられる。ただし，編入学の規定要因を扱った数少ない研究として，高専生を扱った日本労働研究機構（1998）と看護学分野を扱ったグレッグ他（2002），關戸他（2003），平岡他（2001）がある。これらの研究では，大きく分けると，家庭背景，学生本人，高等教育機関の支援という３つの領域から編入学の進学選択を説明している。

家庭背景は，編入学を行う本人や本人の両親の家庭状況の影響を扱うものである。看護職の編入学ニーズを探ったグレッグ他や平岡他（前掲書）は，育児や介護といった家庭に対する責任が進学志望に影響するとしている。また，進路選択過程を面接法で分析した關戸

他（前掲書）は，編入学志望にプラスに働く要因として「周囲の人の賛成・支援」を挙げ，親が大学への進学に賛同していること，また，進学にあたって経済的な準備をしているかどうかが影響していることを指摘している。

学生本人は，学力や学生生活の影響に着目するものである。学力については，上述の４つの研究全てが言及している。日本労働研究機構（前掲書）は２項ロジスティック回帰分析を用いた分析から，中学３年時と高専５年時の成績が良い場合，また，普段の学生生活の中で学習を熱心に行っていた場合に編入学する傾向があることを明らかにしている。同様に關戸他（前掲書）では，「学力への不安」，「受験勉強時間の不足」がマイナスの影響を及ぼすこと，グレッグ他や平岡他（前掲書）でも，入学後の学業が編入学の選択を左右している点を指摘している。

高等教育機関の影響としては，編入学に関わる支援が取り上げられてきた。日本労働研究機構（前掲書）は補習や面接の練習など，編入に関わる学校からの援助が編入学先の大学タイプを規定していると報告している。逆に關戸他（前掲書）では，情報提供や編入学経験者が身近にいないなどの「編入学制度に関する情報不足」，「周囲の人の支援不足」が編入学の実現にマイナスに作用していると報告している。

このように，編入学の進路選択行動に関しては一定の研究成果が蓄積されつつあるが，いくつか課題も抱えている。まずは，対象が限定されてきたという点である。従来の分析は，高専卒業者や看護学分野の学生が中心であった。短大・専門学校進学者でも，あるいは看護分野以外でも同様のことがいえるのか，検証する必要がある。また，編入学の規定要因を総合的に捉えてきたわけでもなかった。従来，個別に扱われがちであった家庭背景，学生本人，高等教育機関の影響を，総合的な視点から理解する必要がある。

以下では，編入学の進路選択プロセスの全体像を明らかにするため，短大，専門学校からの編入学に対する家庭背景，学生本人，そして高等教育機関という３つの主要因の影響を検討する。その際，高校在学時点の志望と短期高等教育機関在学時点の志望の２つに分けて考察を行う。具体的な課題は以下の３点である。第１は，父母が子に期待する学歴や父母の学歴や年収は，どれほど子の編入学志望を規定するか，第２は，学生の性別，成績や，志望進路や学生生活の状況が，どれほど編入学志望に影響するのか，そして第３は，高等教育機関は学生の編入学志望をどこまで左右するのか，という点である。なお第３の点に関して，今回のデータセットには直接進学支援を尋ねた項目は存在しない。そのため，学校種，専門分野，志望順位といった機関属性を考慮しつつ，高等教育機関が介入可能な教育・学習条件が及ぼす影響を検証する。

1.2. データと変数

本研究では，東京大学が学術創成科研によって実施した，高校生調査第１回～第４回ならびに保護者調査によって得られたデータを用いる（表１）[2]。サンプルの絞り込みは以下の手順で行った。まず，第３回調査で短期高等教育機関に在籍していると回答した者のみを選択し，第４回調査でも学校種がわかる者のみを選択した。なお，この調査は高校在籍者を対象にしているため，高専在籍者は含まれていない。次に，就業経験や他の学校に一度属した経験等がある者を除外した。最終的に本分析で用いる対象は，短大，専門学校・各種学校のうち，どちらに属しているか判別可能な者で，かつ高卒後直接進学した者である。

なお，本データセットを用いる際には，以下の２点に留意する必要がある。１点目はパネルデータの追跡時点の問題である。具体的には，第４回調査まででは実際に編入学したか否かを検討することができない。そのため，今回の分析では実際に編入学したか否かではなく，便宜的に編入学の志望を扱う。２点目は学校種の弁別の問題である。各種学校からの編入学は法令上不可能であるが，質問紙の構造上，専修学校と各種学校を判別できないために一緒にしている。そのため，編入学志望者の比率は低めに推定されていることになる。

目的変数としては，編入学の志望に関わる変数を利用する。高校３年生の３月時点（第２回調査）の「卒業後，四年制大学に編入したい」と，短期高等教育機関１年生の11月時点（第３回調査）の「卒業後，四年制大学に編入したい」という変数である。ただし，両

表１　各調査の調査時期

時期	2005年11月	2006年3月	2006年11月	2008年1月
	（高校3年生）	（高校卒業）	（卒業後1年目）	（卒業後2年目）
調査種類	「保護者調査」 「第1回調査」	「第2回調査」	「第3回調査」	「第4回調査」
回収数	4,000人	3,493人	2,906人	1,991人

表２　分析に用いる変数

		各時点の志望を分析する変数群	
		高校（3年）在学時点の志望	短期高等教育機関（2年）在学時の志望
分析の視点	家庭背景	父母の学歴・年収（保・問24，問25）	
		子に期待する進路「短大・専門学校」「大学」（保・問8）	
	学生本人	「性別（男性）」（本1・問32）	
		成績「中学３年時」（本1・問26）	
			成績「優の割合」（本3・問10d）
		志望進路「短大・専門学校」「大学」（本1・問3）	
			学生生活
			「適応状況」（本3・問15a～f）
			「総勉強時間」（本3・問12a～c）
			「総余暇時間」（本3・問12d，12e）
			「満足度」（本4・問11A）
	高等教育機関		学校種「短大」（本3・問10a）
			専門分野「看護・医療分野」（本2・問12c）
			志望順位「第一志望」（本3・問10e）
			教育・学習条件「充実度」（本3・問11）

※ただし，本１：高校生第１回調査，本２：第２回調査，本３：第３回調査，本４：第４回調査，保：保護者調査を指す

変数は４件法で取られているので，「とてもあてはまる」，「あてはまる」を「編入志望」に，「あてはまらない」，「全くあてはまらない」を「志望せず」に再コードした。これら２時点における編入学に対する志望を考察する。

説明変数については表２に示した。家庭背景については，階層を表すものとして両親の学歴と年収，並びに子に期待する進路を取り上げる。学生本人については，性別，中３及び短期高等教育機関での成績，高卒時の進路志望，学生生活面として，適応状況，生活時間，満足度に着目する。高等教育機関については，短大，専門学校・各種学校という学校種，看護分野か否かという専門分野，志望順位，そして教育・学習条件である。

以下２節では，短期大学および専門学校進学者のプロフィールを提示した後，家庭背景，学生本人，高等教育機関の順に諸変数と編入学志望の関連を確認する。続く３節では，２項ロジスティック回帰分析を用い，諸変数を同時に統制した時に個々の変数が持つ効果量を検討する。最後に４節では，分析の結果から結論と今後の課題を示す。

２．編入学志望と家庭背景，学生本人，高等教育機関

2.1. 分析対象者のプロフィール

最終的に考察の対象となった短期高等教育機関への在籍者は以下の通りである。総数は508名である。内訳は，短期大学在籍者が207名で，そのうち男性18名，女性189名，専門学校・各種学校在籍者が301名で，そのうち男性109名，女性192名となっている。高校在学時点の編入学志望者の割合は，短期大学進学者が26％，専門学校・各種学校進学者が９％である。また短期高等教育機関在学時点のそれは，短期大学在籍者が30％，専門学校・各種学校在籍者が７％である。

高校在学時点から短期高等教育機関への進学後にかけて編入学に対する志望がどのように変化したかについても紹介しておく。高校在学時点で志望していた者がそのまま短期高等教育機関在学時点でも編入学を志望している割合は，短期大学進学者で50人中の34人（74％），専門学校・各種学校在籍者で19人中の12人（64％）である。また，志望していなかった者がそのまま志望しないままでいる割合は，短期大学進学者で142人中の120人（85％），専門学校・各種学校在籍者で212人中の203人（96％）である。なお，今回の分析では２時点の変化の構造までは考察しきれておらず，今後の課題として残されていることを予め断っておく。

2.2. 家庭背景

表３に，家庭背景変数の平均値を編入学志望者とそうでない者とに分けて，高校在学時と短期高等教育機関在学時の時点ごとの特徴を示した。表の見方としては，編入学志望者の平均値（Mean）と志望していない者の平均値の異同に着目する。

両親の階層については，父母の学歴，年収ともに値

表３　家庭背景変数の代表値

	高校（3年）在学時									短期高等教育機関（2年）在学時								
	全体			編入志望			志望せず			全体			編入志望			志望せず		
	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.
階層																		
父学歴	408	2.82	0.98	68	3.01	1.00	340	2.78	0.97	481	2.82	0.98	84	3.00	1.01	397	2.78	0.98
母学歴	421	2.57	0.65	70	2.66	0.56	351	2.56	0.66	499	2.58	0.66	84	2.58	0.64	415	2.58	0.66
父年収	397	5.18	1.34	66	5.23	1.32	331	5.17	1.35	470	5.17	1.37	79	5.25	1.45	391	5.15	1.35
母年収	411	2.32	1.07	68	2.44	1.16	343	2.29	1.05	490	2.31	1.05	81	2.41	1.17	409	2.29	1.03
子に期待する進路																		
短大・専門学校*	425	0.95	0.22	70	0.83	0.38	355	0.97	0.17	505	0.95	0.22	84	0.82	0.39	421	0.97	0.16
大学*	425	0.47	0.50	70	0.70	0.46	355	0.43	0.50	505	0.45	0.50	84	0.70	0.46	421	0.40	0.49

が大きいほど学歴は高く，年収も高いことを示している。また子に期待する進路については，子に「短大・専門学校」への進学を志望していれば１，そうでなければ０の平均値であり，「大学」への進学期待も同様である。なお，変数名の末尾に星印（*）が付されている変数は，両時点において群間の平均値の差が全て５％水準で有意なことを示す。１時点しかない変数を除いて，どちらか１時点でしか群間の平均値の差が有意な変数はなかった。

まず，父母の学歴と年収を見ると，編入学志望者の父母のほうが学歴，年収ともに若干高い傾向にあるが，統計的に有意な差は認められない。この傾向は，高校在学時と短期高等教育機関在学時で共通している。他方で，父母が子に期待する学歴を見ると，編入学を志望しない者の父母ほど，子に短大・専門学校への進学を期待し，また編入学の志望者の父母ほど，子に大学への進学を期待している。この傾向は，高校在学時と短期高等教育機関在学時で共通に認められる。

この結果は，親の子への進学期待の構造の方が，親の学歴や年収よりも子の編入学の志望に影響していることを示唆している。この背景として想定されるのは次の２点である。１つは，就職か，短期高等教育への進学か，大学への進学かという高卒時の進路選択については，親の学歴や年収が大きく影響しているが，短期高等教育への進学層を対象としたことで，それらの分散自体が小さく影響が出にくくなっていること，もう１つは，日本では進学に関する費用を「無理する家計」が負担してきたと言われており，編入学もまた収入による進学可能性の差を「無理する家計」が縮めている可能性があることを指摘できる。

2.3. 学生本人

学生に関わる変数は，男性であれば１，女性であれば０，中学３年時点の成績がクラスの上位に入るほど，また短期高等教育機関での成績は優の割合が多いほど数値は高くなる。高卒時の志望進路に「短大・専門学校」，「大学」が当てはまればそれぞれ１，当てはまらなければ０となる。適応状況については，因子得点が高ければ適応していないことを意味する。総勉強時間ならびに総余暇時間は数値が高いほど時間を費やしており，満足度は満足しているほど数値は高くなる（表４）。

性別については統計的に有意な差は認められない。念のために数値も見てみると，高校段階では編入学志望者の方で男性が若干多く，短期高等教育機関進学後ではこの関係に若干の逆転が見られる。成績については，中学３年時点の成績については統計的に有意な差があり，高校在学時と短期高等教育機関在学時で共通して，編入学を志望している者ほど成績優秀者層が多い。他方で，短期高等教育機関に進学後の成績である優の割合には，有意な差は認められなかった。ただし，編入学を志望している者の方が優の割合は高い傾向にある。

高卒時の進路志望については，編入学志望者ほど大学への進学を志望し，逆に編入学を志望しない者ほど短大・専門学校への進学を志望しており，この傾向は高校在学時と短期高等教育機関在学時で共通に認められる。短期高等教育機関での学生生活については，適応状況に関しては統計的に有意な差がある[3)]。そして，編入学志望者の方が志望していない者に比べて，短期高等教育機関への適応感がない傾向にある。満足度については統計的に有意な差はないが，編入学志望者の方が満足度も低い傾向にある。他方で，総勉強時間については，統計学的に有意な差はないものの，編入学志望者の方が数値は高く，勉強時間は長い傾向にある。

以上をまとめると，まず子の志望学歴が親の期待学歴と同じ方向で編入学志望に対して影響を及ぼしており，進学アスピレーションの重要性が改めて確認された。また中学３年時点の成績が有意であり，短期高等教育機関での成績も高めであることから，成績優秀者ほど編入学を志望する傾向にある。なお，在籍している短期高等教育機関への適応感が低く，満足度も低い

表４　学生本人変数の代表値

	高校（3年）在学時									短期高等教育機関（2年）在学時								
	全体			編入志望			志望せず			全体			編入志望			志望せず		
	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.
性別																		
男性	425	0.23	0.42	70	0.27	0.45	355	0.22	0.41	505	0.25	0.43	84	0.23	0.42	421	0.25	0.44
成績																		
中学3年時*	425	3.12	1.09	70	3.36	1.23	355	3.07	1.06	505	3.10	1.09	84	3.37	1.17	421	3.04	1.07
優の割合										324	5.25	2.93	53	5.55	2.80	271	5.19	2.95
高卒時進路希望																		
短大・専門学校*	425	0.96	0.20	70	0.87	0.34	355	0.97	0.16	505	0.96	0.19	84	0.89	0.31	421	0.98	0.15
大学*	425	0.35	0.48	70	0.69	0.47	355	0.29	0.45	505	0.33	0.47	84	0.61	0.49	421	0.28	0.45
学生生活																		
適応状況*										505	0.00	0.89	84	0.30	0.93	421	-0.06	0.87
総勉強時間										494	1.59	0.58	84	1.68	0.68	410	1.57	0.56
総余暇時間										493	1.94	0.72	80	2.04	0.68	413	1.92	0.72
満足度										500	3.15	0.69	83	3.04	0.69	417	3.18	0.69

者ほど編入学を志望していると想定されるが，先述した成績の特徴や，総勉強時間は編入を志望しない者とほとんど変わらないことから，学生は在籍している高等教育機関の課すプログラムに対してはそれなりに適応している。編入学試験というものが控えていることの影響もあろうが，進学先への不満や不安を抱えつつ，学びからの逃避はしていないということである。

2.4. 高等教育機関

最後に，高等教育機関自体の影響についてである（表５）。学校種については，短大であれば１，専門学校であれば０，専門分野については，看護分野や医療系の学科であれば１，その他であれば０，志望順位は第一志望であれば１，それ以外であれば０として平均値を算出している。教育・学習条件については，因子得点が高いほど充実していることを意味する。

まず，短大ダミーの値から，高校在学時と短期高等教育機関在学時に関係なく，編入学志望者の方で短大は多いことがわかる。次に，編入学志望の有無による専門分野の偏りはないと解釈できる。第一志望ダミーを見ると，編入志望者では第一志望でないと答える者が多い。短期高等教育機関の中での第一志望か否かということもあるかもしれないが，学生本人の変数で編入学志望者ほど大学進学志望者が多かったことと整合的な結果でもある。最後に，教育・学習条件として充実度[4]の因子得点の平均値を確認すると，編入学志望者の方が充実していないと答える傾向にある。適応感の低さと同様に，教育・学習条件についても不満を持っている者ほど，編入学を志望していると推察される。

３．編入学志望の因果の構造

２節の分析から，編入学志望とそうでない者を分かつものが何であるのか，ある程度は推定できる。しかし，家庭背景，学生本人，高等教育機関と編入学志望との関係を記述的に紹介したに過ぎず，編入学志望の因果の構造を検証したものではない。また，これら３つの領域を総合した際の，編入学に対する規定要因を検討したわけでもない。そこで以下では，３つの領域の変数を同時に投入した際の，編入学志望の規定要因を検討する。表６は，二項ロジスティック回帰分析（強制投入法）の結果である。なお10％水準で有意なものまで，表中には網がけを付している。

表５　高等教育機関変数の代表値

	高校（3年）在学時									短期高等教育機関（2年）在学時								
	全体			編入志望			志望せず			全体			編入志望			志望せず		
	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.
学校種																		
短大*	425	0.45	0.50	70	0.71	0.46	355	0.40	0.49	505	0.41	0.49	84	0.74	0.44	421	0.34	0.48
専門分野																		
看護・医療	425	0.26	0.44	70	0.27	0.45	355	0.25	0.44	505	0.24	0.43	84	0.24	0.43	421	0.24	0.43
志望順位																		
第一志望*	425	0.80	0.40	70	0.51	0.50	355	0.86	0.35	505	0.82	0.38	84	0.60	0.49	421	0.86	0.34
教育・学習条件																		
充実度*										505	0.00	0.92	84	-0.41	1.11	421	0.08	0.85

表６　二項ロジスティック回帰分析の結果

	高校（3年）在学時の希望						短期高等教育機関（2年）在学時の希望					
	B	SE	Wald	p-value	Exp(B)	95% CI	B	SE	Wald	p-value	Exp(B)	95% CI
定数	-0.35	0.98	0.13	0.72	0.70		-2.07	1.72	1.46	0.23	0.13	
家庭背景												
階層変数												
父学歴：高等教育	0.31	0.32	0.93	0.33	1.36	0.73 ~ 2.54	0.06	0.40	0.02	0.88	1.06	0.48 ~ 2.34
母学歴：高等教育	-1.26	0.83	2.32	0.13	0.28	0.06 ~ 1.44	-1.16	0.82	2.01	0.16	0.31	0.06 ~ 1.56
父年収：500~700万	0.34	0.39	0.77	0.38	1.41	0.66 ~ 3.01	-0.18	0.49	0.13	0.71	0.84	0.32 ~ 2.19
父年収：700万以上	-0.24	0.38	0.40	0.53	0.79	0.37 ~ 1.66	-0.20	0.44	0.19	0.66	0.82	0.34 ~ 1.96
母年収：収入あり	-0.29	0.36	0.65	0.42	0.75	0.37 ~ 1.52	-0.56	0.44	1.64	0.20	0.57	0.24 ~ 1.35
子に期待する進路												
短大・専門学校	-1.79	0.54	10.85	0.00	0.17	0.06 ~ 0.48	-1.56	0.73	4.61	0.03	0.21	0.05 ~ 0.87
大学	0.71	0.34	4.49	0.03	2.04	1.06 ~ 3.95	0.88	0.42	4.47	0.03	2.42	1.07 ~ 5.49
学生本人												
性別：男性	-0.06	0.36	0.03	0.87	0.94	0.46 ~ 1.91	0.39	0.54	0.53	0.47	1.48	0.51 ~ 4.28
志望進路												
短大・専門学校	-0.93	0.62	2.23	0.14	0.39	0.12 ~ 1.34	-0.20	0.82	0.06	0.81	0.82	0.17 ~ 4.04
大学	1.42	0.33	18.77	0.00	4.12	2.17 ~ 7.83	0.70	0.43	2.62	0.11	2.01	0.86 ~ 4.66
成績												
中学3年時点	0.10	0.15	0.49	0.49	1.11	0.83 ~ 1.48	0.32	0.19	2.74	0.10	1.37	0.94 ~ 2.00
優の割合							-0.04	0.07	0.43	0.51	0.96	0.84 ~ 1.09
適応状況							0.25	0.29	0.77	0.38	1.28	0.73 ~ 2.25
総勉強時間												
中時間層							0.48	0.42	1.27	0.26	1.61	0.70 ~ 3.69
長時間層							2.11	0.85	6.23	0.01	8.25	1.57 ~ 43.30
総余暇時間												
短時間層							0.59	0.47	1.55	0.21	1.80	0.71 ~ 4.54
中時間層							0.08	0.60	0.02	0.89	1.09	0.34 ~ 3.51
満足度							-0.12	0.30	0.15	0.70	0.89	0.50 ~ 1.60
高等教育機関												
短期大学							1.89	0.54	12.27	0.00	6.63	2.30 ~ 19.12
第一志望							-0.88	0.45	3.78	0.05	0.41	0.17 ~ 1.01
看護・医療分野							0.17	0.53	0.10	0.75	1.18	0.42 ~ 3.35
充実度							-0.06	0.26	0.05	0.82	0.94	0.56 ~ 1.58
	Omunibus test χ^2=67.931、df=11、p=.000						Omunibus test χ^2=95.241、df=22、p=.000					
	Nagelkerke psuedo-R^2= .267						Nagelkerke psuedo-R^2 =.420					
	Hosmer-Lemeshow test χ^2=13.262、df=8、p=.103						Hosmer-Lemeshow test χ^2=6.191、df=8、p=.626					

まず家庭背景の影響から見ると，２節と同様の結果が得られた。即ち，子どもの編入学志望に，両親の学歴や年収の影響は統計的に有意でないのに対して，親の子に対する学歴期待の影響は統計的に有意であった。親が子に対して短大・専門学校への進学を期待していると，子本人も編入学，即ち大学進学を志望しない傾向にある。逆に，親が子に対して大学進学を期待している場合には，子も編入学を志望する傾向にある。

学生本人に関する変数の影響を見ると，大学への進学志望は，高校在学時点での編入学志望には影響を及ぼしている。進学先をめぐり，大学への進学志望と短期高等教育機関への進学という現実との間にズレが生じており，それが編入学志望へと結びついている。ただし，短期高等教育機関に進学した後になると，係数の符号は正であるものの，大学への進学志望は有意でなくなる。学生生活への適応に関する変数の影響も同様に有意でなくなっている。

他方で，中学３年時の成績は，高校在学時の編入志望には有意でないが，短期高等教育進学後には有意なままである。また，短期高等教育進学後の学習時間も，長時間学習している層ほど編入学を志望する結果となっている。短期高等教育進学後に学生本人の変数が編入学志望に与える影響は，どちらかといえば学業面がメインとなっているのである。

最後に，高等教育機関の影響を確認すると，まず，第一志望ダミーはここでも有意であった。つまり，進学先の短期高等教育機関が第一志望であれば，編入学を志望しなくなる。また，短期大学ダミーも統計的に

有意であった。これは，1999年から編入学が可能となった専門学校と，発足当時から編入学が可能であった短期大学との間における，編入学という進路選択肢の確立度合いの差を反映したものといえる。統計的に有意ではないが，係数の符号に着目すると，看護・医療分野であれば編入学を志望し，教育・学習条件が充実すれば編入学を志望しない傾向にある。

4．結論と展望

4.1. 分析のまとめ

これまで，家庭背景，学生本人，高等教育機関という３つの領域を設定し，高校在学時と短期高等教育在籍時という２時点において，編入学志望を規定する要因を探ってきた。

家庭背景については，父母の学歴や，年収という学費負担能力ではなく，父母が子に期待する学歴という期待変数が編入学の志望を強く規定していた。この期待変数は保護者調査に基づくもので，短期高等教育機関在籍時の志望とはタイムラグがあるものの，高校在学時，短期高等教育機関在籍時の両時点を通じて父母の子に対する学歴期待は安定した影響を及ぼしている。

編入学志望に影響を及ぼすのは家庭背景だけではない。学生本人については，高校在学時の大学進学志望の有無が，特に高校在学時点での編入学の志望に影響していた。しかし短期高等教育機関に進学した後は，寧ろ学業面が編入学の志望を強く規定していた。短期高等教育進学後も編入学の志望を維持するためには，元々大学に行きたかったという進学志望だけでなく，中学３年時点の学力や，短期高等教育機関における学習行動も重要な要素となる。これは，指定校推薦や同一法人内の編入学でもない限り，編入学も学力試験を伴うものであること，そして編入学後の単位認定を考え，取得単位を増やして編入学後の学業負担の軽減を試みたことを反映した結果であると考えられる。

高等教育機関の影響については，今回用いた調査データが必ずしも編入学を意識したものではないため，十分な検討が行えなかった。ここでは，短期大学の方が専門学校よりも編入学志望に向かわせ易いルートであることに触れておきたい。専門学校は短期大学と異なり，近年になって編入学が可能となったため，編入学資格として専門学校卒を認めていない大学も存在する（立石 2008）。短期大学は進学規模自体が縮小し，編入学の比率も高い水準に到達している。量的な観点からいえば，今後は専門学校からの編入学の動向が鍵を握っているといえる。

今回の分析では，編入学に対する志望という点しか扱えていないが，親の子に対する進学期待や本人の進学志望という，いわば進学に関わるモチベーションの側面と，高等教育への進学以前の学力や進学後の学習行動という，学業の実態に関わる側面の双方が，志望を左右していた。編入学という進路選択の可能性が，進学に関わる意欲や学習行動如何で開かれるという事実は，短大進学者のみに当てはまるわけではない。だとすれば，高等教育段階のファーストステージの位置づけは短期大学に限る必要はない。専門学校や今回扱えなかった高専を含めて，それぞれの短期高等教育機関が，ファーストステージに対していかなる認識や戦略を持ち，それに基づく実践を行っていくかが問われている。

4.2. 課題と展望

繰り返し述べるように，本分析が対象としたのは編入学の志望の構造であり，編入学の結果までを追跡できていない。志望の規定要因はもちろん結果にも影響を及ぼすと想定されるため，今回の考察にも一定の意義はある。しかしながら，結果の規定要因が同様とは限らない。今回の統計分析の結果では有意でなかった，父母の年収という家計負担能力や，短期高等教育機関進学後の成績が，実際の編入学の進学選択結果については影響している可能性も否定できない。この点については学術創成科研の第５回調査の結果を待って，改めて検証してみる必要がある。

他方で，今回用いたデータは，学生についてはパネル調査であり，かつ保護者調査も実施しているという点で，これまでにない重層的な分析が行える利点がある。ただし，編入学に特化した調査データではないために，必ずしも編入学の志望構造を包括的に捉えきれたとはいえない。

編入学の志望や結果の構造は果たして，今回指摘したような，親の進学期待や本人の進学アスピレーション，学習行動のみで専ら規定されているのだろうか。あるいは，質問項目や調査方法自体を変更，拡張していくことで，見落としていた事実に気づくかもしれない。そのためには，編入学のようなマイナー・マージナルな学生を分析するための方法論のあり方について，さらに議論し模索していく必要がある。

さらに踏み込んでいえば，編入学のみがマイナー・マージナルな存在というわけではない。実際の分析には困難が伴うが，退学者も重要な分析対象であるし，編入学も退学もせずに卒業，就職していく学生の中にも，マイナー・マージナルな性質を備えているがゆえに，課題に直面している者が少なからず存在している可能性がある。その意味では，可視化されやすい編入学等の枠組のみに固執することは寧ろ危険ともいえ，

他のマージナルな存在も包摂できるような分析枠組への発展を志向していかなければならない。そのためには，これまでの一般的な，あるいはマージナルな存在に特化した学生調査を超えた，総合的な学生調査の開発が課題とされている。

【注】

1）短大からの前年度卒業者に占める編入学者の割合の正確な数値は分からないため，ここでは便宜的に，短大からの編入学者数を前年度卒業者数で除した値で近似している。したがって，この数値は過年度入学者が含まれている。

2）調査の詳細については以下のURLを参照のこと。
http://ump.p.u-tokyo.ac.jp/crump/cat77/cat81/

3）適応状況は，第３回調査の問15a.からf.を用いて主因子法で因子分析（プロマックス回転）を行って得た因子得点である。各問はそれぞれ，a.「やりたいことが見つからない」，b.「学校になじめない」，c.「授業についていけない」，d.「経済的に勉強を続けることが難しい」，e.「卒業後の進路のことが今から不安だ」，f.「いまの大学・学校を辞めたい」となっている。

4）教育・学習条件の充実度は，第３回調査の問11a.からg.を用いて主因子法で因子分析（プロマックス回転）を行って得た因子得点である。各問はそれぞれ，a.「将来の仕事に役立つ知識や技術を身につけられる」，b.「自分の興味・関心に合った授業が多い」，c.「資格取得のための授業や講座が充実している」，d.「就職までのサポートがしっかりしている」，e.「授業に熱心な教員が多い」，f.「学習意欲のある学生が多い」，g.「授業料を払って通うだけの価値がある」である。

【引用文献】

グレッグ美鈴・池邉敏子・池西悦子・林由美子・橋本波枝・平山朝子（2002）「岐阜県内看護職のキャリア発達に関する調査　第３報　－編入学を希望する看護職の要因分析と編入学への期待－」『岐阜県立看護大学紀要』第２巻１号，45-47頁。

關戸啓子・軽部太一・郷木八重子・世古まゆみ・歳常沙樹（2003）「看護系大学への編入学に至る進路決定過程に関する研究」The Journal of Nursing Investigation，１巻１号，44-51頁。

立石慎治（2008）「高等教育機関を移動する学生－受験機会と入学実態－」『大学評価・学位研究』第７号，17-32頁。

立石慎治（2009）「高等教育機関間の学生の移動：日米の編入学研究の動向と課題」『大学論集』第40集，217-232頁。

日本労働研究機構（1998）『高専卒業者のキャリアと高専教育』調査研究報告書No.116，1-261頁。

平岡敬子・山内京子・松本信子・中島優子・一色康子（2001）「呉大学編入学希望者のニーズ調査　－呉および広島地域の病院に勤務する看護職の場合－」『看護学統合研究』第２巻２号，42-46頁。

文部科学省『学校基本調査』各年版。

文部科学省(2009)『全国短期大学・高等専門学校一覧』平成21年度版，財団法人文教協会。